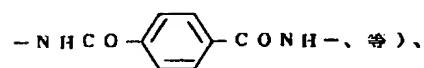
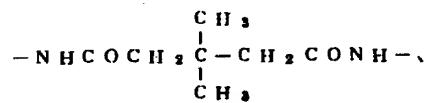


$\text{CH}_3$   
 $\text{---S---CH}_2\text{C---CH}_2\text{---S---}$ 、等)を表わし、X  
 $\text{CH}_3$

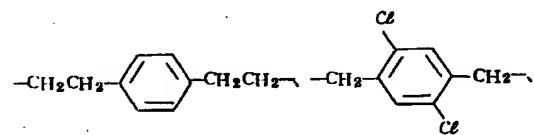
$-\text{NHCO---R}_2\text{---CONH---}$ 基 ( $\text{R}_2$  は置換または無置換のアルキレン基またはエニレン基を表わし、例えば  $-\text{NHCOCH}_2\text{CH}_2\text{CONH---}$ )、



$-\text{S---R}_2\text{---S---}$  基 ( $\text{R}_2$  は置換または無置換のアルキレン基を表わし、例えば、  
 $-\text{S---CH}_2\text{CH}_2\text{---S---}$ 、

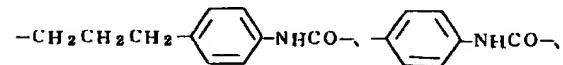
- / 5 -

$-\text{NHCO---}$ 、 $-\text{CONH---}$ 、 $-\text{O---}$ 、 $-\text{OCO---}$  およびアラルキレン基(例えば



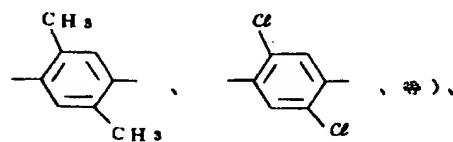
等)から選ばれたものを組合せて成立する基を含む。  
 好ましい連結基としては以下のものがある。

$-\text{NHCO---}$ 、 $-\text{CH}_2\text{CH}_2\text{---}$ 、



は前記 1 価の基を適當なところで 2 価の基にしたものと表わす。

一般式(I)であらわされるものがビニル単量体の中にある場合の  $\text{R}_1$  であらわされる連結基は、アルキレン基(置換または無置換のアルキレン基で、例えば、メチレン基、エチレン基、 $1,1\text{O}$ ーデシレン基、 $-\text{CH}_2\text{CH}_2\text{OCH}_2\text{CH}_2-$ 、等)、エニレン基(置換または無置換のエニレン基で、例えば、 $1,4\text{-フェニレン基}$ 、 $1,3\text{-フエニレン基}$ 、

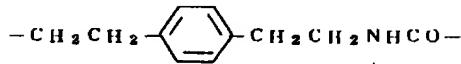


- / 6 -

$-\text{CH}_2\text{CH}_2\text{NHCO---}$ 、 $-\text{CH}_2\text{CH}_2\text{---O---C---O---}$

$-\text{CONH---CH}_2\text{CH}_2\text{NHCO---}$ 、

$-\text{CH}_2\text{CH}_2\text{O---CH}_2\text{CH}_2\text{---NHCO---}$ 、



なおビニル単量体の中のビニル基は一般式(I)であらわされるもの以外に置換基を持つてもよく、好ましい置換基は水素原子、塩素原子、または炭素数 1 ~ 4 価の低級アルキル基(例えばメチル基、エチル基)を表わす。

芳香族一级アミン現像薬の酸化生成物とカップリングしない非発色性エチレン様単量体としてはアクリル酸、 $\alpha$ -クロロアクリル酸、 $\alpha$ -アルアクリル酸(例えばメタクリル酸など)およびこれらのアクリル酸類から誘導されるエステルもしくはアミド(例えばアクリルアミド、 $n$ -ブチルア

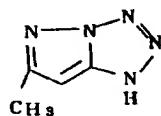
- / 7 -

クリルアミド、ヒープチルアクリルアミド、ジアセトンアクリルアミド、メタアクリルアミド、メチルアクリレート、エチルアクリレート、n-ブロピルアクリレート、ヒープチルアクリレート、ヒープチルアクリレート、1-ヒープチルアクリレート、2-エチルヘキシルアクリレート、ローオクチルアクリレート、ラウリルアクリレート、メチルメタクリレート、エチルメタクリレート、ヒープチルメタクリレートおよびタヒドロキシメタクリレート)、メチレンジビスアクリルアミド、ビニルエステル(例えばビニルアセテート、ビニルプロピオネートおよびビニルラウレート)、アクリロニトリル、メタクリロニトリル、芳香族ビニル化合物(例えばステレンおよびその誘導体、ビニルトルエン、ジビニルベンゼン、ビニルアセトフェノンおよびスルホスチレン)、イタコン酸、シトラコニ酸、クロトン酸、ビニリデンクロライド、ビニルアルキルエーテル(例えばビニルエチルエーテル)、マレイン酸、無水マレイン酸、マレイン酸エステル、N-ビニル-2-ピロリドン、

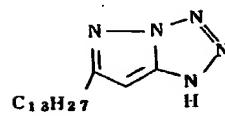
- 19 -

はない。

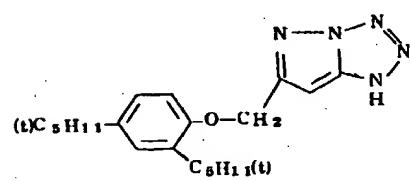
(1)



(2)

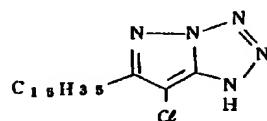


(3)

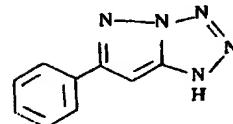


- 21 -

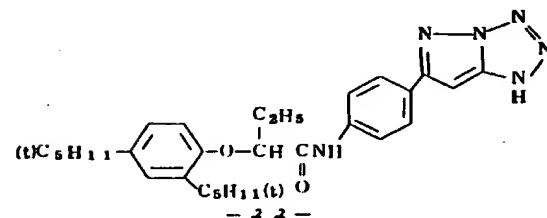
(4)



(5)

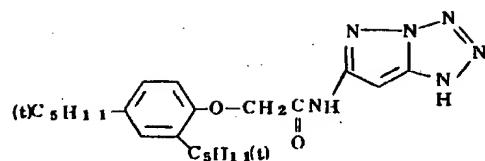


(6)

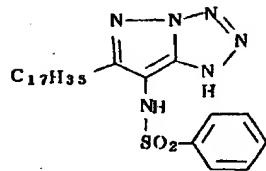


- 22 -

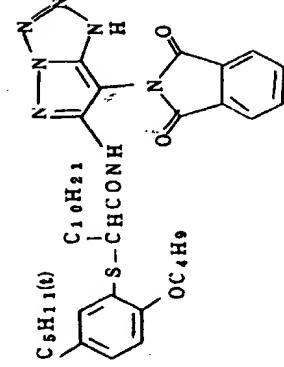
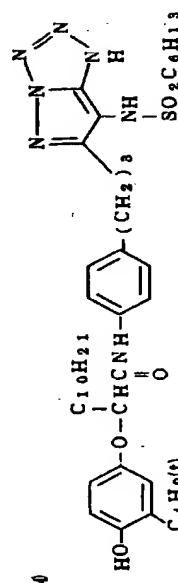
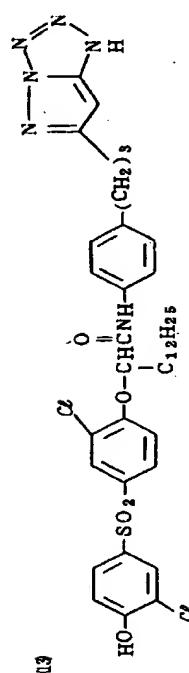
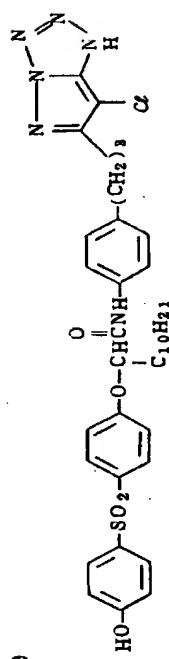
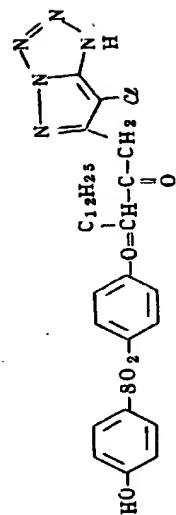
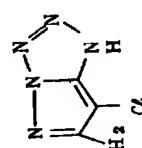
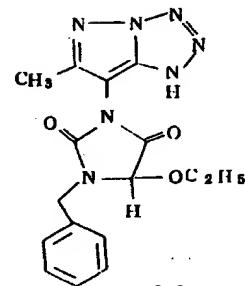
(7)



(8)



(9)



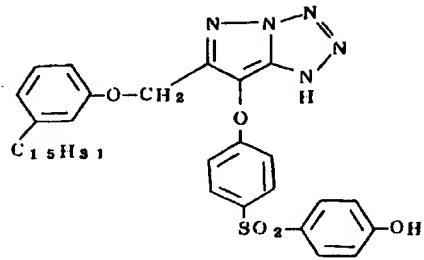
(12)

— 25 —

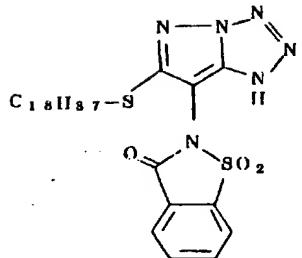
— 313 —

— 26 —

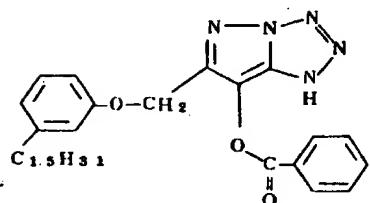
06



08



07



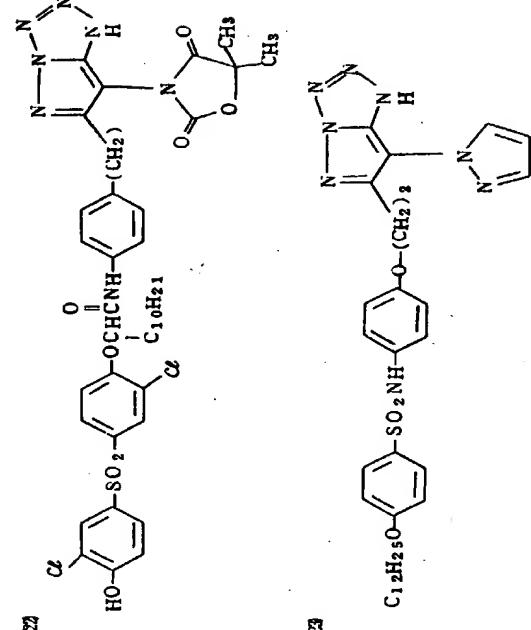
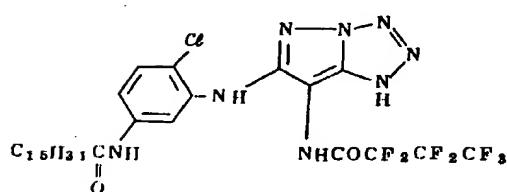
09



- 27 -

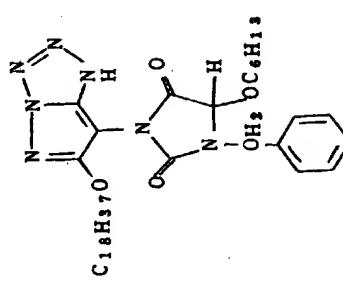
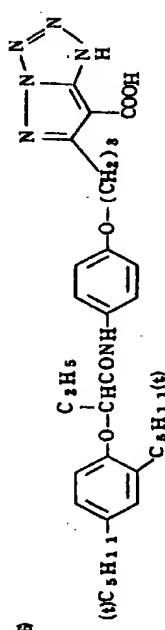
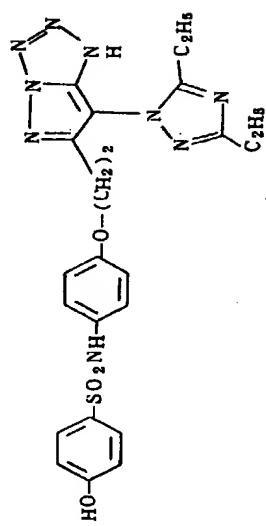
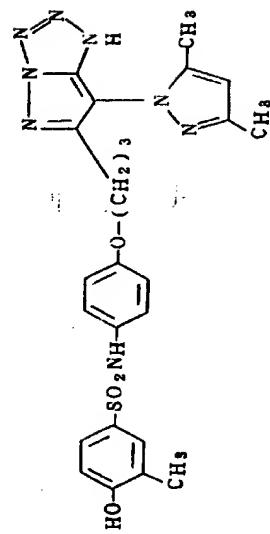
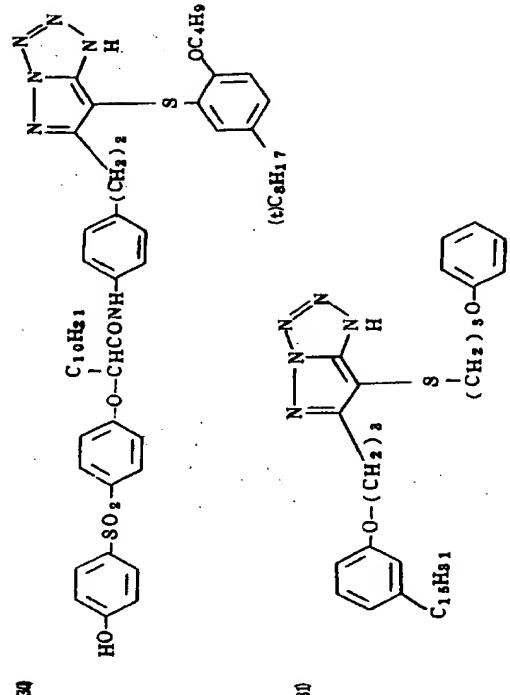
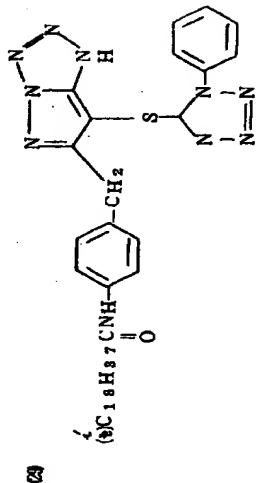
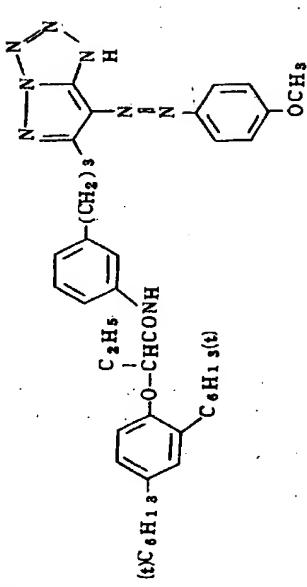
- 28 -

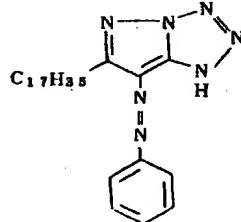
20



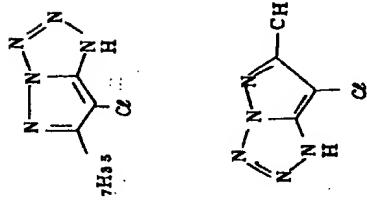
- 29 -

- 30 -



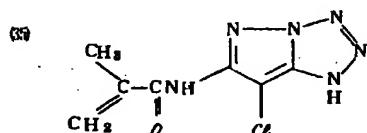


以下はポリマー・カプラー用単体として好ましい例である。



82

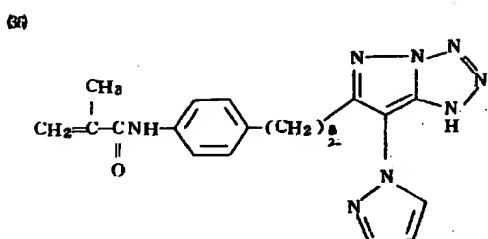
2



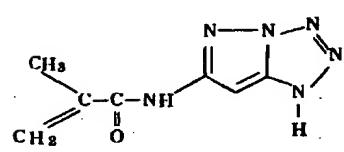
34

- 35 -

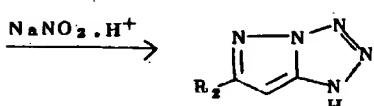
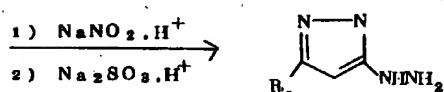
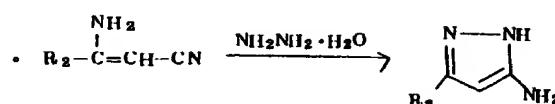
24



570



## ① 質権の成立

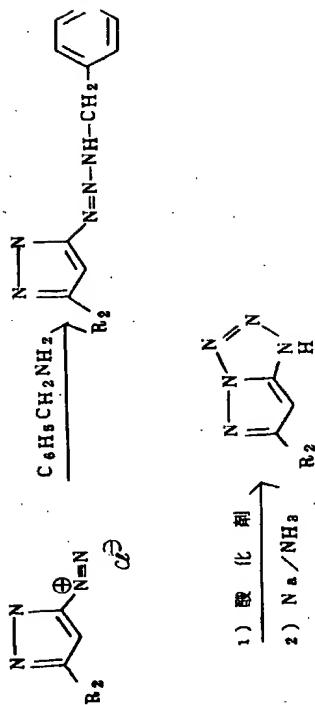


本発明のカブラーは一般的に下記の方法で合成することができる。

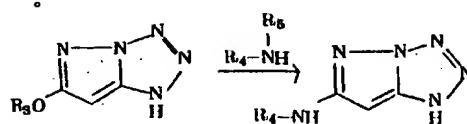
- 37 -

- 36 -

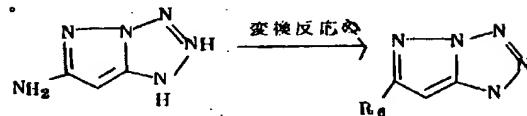
—316—



R<sub>2</sub>はアルキル基、アリール基、ヘテロ環基、アルコキシ基、アリールオキシ基、アルキルチオ基、アリールチオ基を表わす。)



(  $R_3$  はアルキル基、アリール基を換わし、  
 $R_4$ 、 $R_5$  は水素原子、アルキル基、アリール基、ヘテロ環基を炭わす。)



(R<sub>6</sub>は水素原子、ハロゲン原子、ヒドロキシ基、アシルアミノ基、スルホンアミド基、ウレアド基、イミド基、スルフアモイル基、アルコキシカルボニルアミノ基、カルバモ

- 39 -

イルアミノ基、を表わす。)

上記反応のうち基本骨核の合成については、  
*Angew. Chem. Int. Ed. Eng.* 21 698  
 (1982年)、*Chem. Ber.* 89 255  
 0 (1956年)を参考にして合成する事ができる。  
 置換基の合成については、公知の方法で合成  
 することができる。

## ② ポリマー・カプラーの一観的合成法

ボリマーカプラーの合成法については溶液重合および乳化重合があるが、まず溶液重合については米国特許3,451,820号、特開昭58-28474号に記載の方法で合成でき、一般式Iであらわされる部分を含む単體カプラーと非発色性エチレン様単量体（例えばアクリル酸、 $\alpha$ -クロロアクリル酸、メタアクリル酸のようなアルアクリル酸またはそのアクリル酸から誘導されるエステルもしくはアミド（例えばアクリルアミド、ローブチルアクリルアミド、n-ブチルメタアクリレート、メチルメタアクリレート、エチルメタアクリレート、等））を適当な比率で、可溶性有機溶媒（例えば、ジオキサン、メチルセルソルブ、等）に溶解または混合し、適当な温度（30～100°位）で重合開始（物理的作用として、紫外線、高エネルギー輻射等によるか化学的作用としてバーサルフェート、過酸化水素、ベンゾイルバーオキシド、アゾビスアルキロニトリル等の開始剤によるフリーラジカルの生成によって開始）することができる。近合反応終了後、有機溶媒への

- 42 -

押出、濃縮、あるいは水への注加によって重合体を単離することができる。また乳化重合法については米国特許3,370,952号に記載の方法で合成することができる。

### (3) カップリング基脱基の一般的な導入法

#### (1) 酸素原子を連結する方法

本発明の4当量母核カプラー、1H-ピラゾロ[1,5-d] -テトラゾール型カプラーを実施例1に示すような方法で色素を形成させ、それを酸触媒の存在下で加水分解しケトン体とし、このケトン体をp-d-炭素を触媒とする水素添加、Zn-酢酸による還元または水素化ホウ素ナトリウムによる還元で、1-ヒドロキシ-1H-ピラゾロ[1,5-d] -テトラゾールを合成することができる。これを各種ハライドと反応させて目的とする酸素原子を連結したカプラーが合成できる。(米国特許3,926,631号、特開昭57-20817号参照)

#### (2) 硫素原子を連結する方法

硫素原子を連結する方法には大きく分けて3つ

- 43 -

7位にフェノキシ基を有する化合物もこの方法で合成することができる。

第3の方法は、6または10電子系芳香族環素へテロ環を7位に導入する場合に有効な方法で、特公昭57-36577号に記載されているように前記第2の方法で合成した7-ハログン体に対して2倍モル以上の6または10電子系芳香族環素へテロ環を添加し0°～150°Cで無溶媒加熱するか、またはジメチルホルムアリデヒド、スルホランまたはヘキサメチルホスホトリアミド等非プロトン性極性溶媒中、30°～150°で加热することによつて7位に硫素原子で連結した芳香族環素へテロ環基を導入することができる。

#### (3) イオウ原子を連結する方法

芳香族メルカプトまたはヘテロ環メルカプト基が7位に置換したカプラーは米国特許3,227,556号に記載の方法、すなわちアリールメルカプタン、ヘテロ環メルカプタンおよびその対応するジスルフィドをハログン化炭化水素系溶媒に溶

- 44 -

の方法がある。第1の方法は、米国特許3,419,391号に記載されているように適当なニトロソ化剤でカップリング活性位をニトロソ化し、それを適当な方法で還元(例えば、p-d-炭素等を触媒とする水素添加法、塩化第一スズ等を使用した化学還元法)し、1-アミノ-1H-ピラゾロ[1,5-d] -テトラゾールとして各種ハライドと反応させ、主としてアミド化合物は合成できる。

第2の方法は、米国特許3,225,067号に記載の方向、すなわち: 適当なハロゲン化剤、例えば、塩化スルフリル、塩素ガス、臭素、N-クロロコハク酸イミド、N-ブロモコハク酸イミド等によつて7位をハロゲン化し、その後、特公昭56-175135号に記載の方法で塩素ヘテロ環を適当な塩基触媒、トリエチルアミン、水酸化ナトリウム、ザアザビシクロ[2,2,2]オクタノン、無水炭酸カリウム等の存在下で置換させ、7位に硫素原子で連結したカプラーを合成することができる。酸素原子で連結した化合物のうち、

- 44 -

解し、塩素または塩化スルフリルでスルフエニルクロリドとし非プロトン性溶媒中に溶解した4当量1H-ピラゾロ[1,5-d] -テトラゾール系カプラーに添加し合成することができる。アルキルメルカプト基を7位に導入する方法としては米国特許4,244,723号記載の方法、すなわちカプラーのカップリング活性位置にメルカプト基を導入し、このメルカプト基にハライドを作用させる方法とS-(アルキルチオ)イソチオ尿素塩酸塩(または臭素塩酸)によつて一工程で合成する方法とが有効である。

#### 合成例1

1H-6-メチルピラゾロ[1,5-d] -テトラゾール(例示カプラー(1))の合成

#### 1) 中間体1 3-アミノ-3-メチルピラゾールの合成

3-アミノクロトニトリル(市販品、Aldrichカタログ)18.6gと80%抱水ヒドラジーノ21.6gを300mlのエタノール中で12時間加熱攪拌した。室温に戻した後減圧濃縮し、続い

- 46 -

て減圧蒸留(117°C/0.4mmHg)して3-アミノ-5-メチルピラゾール1,7,7タを蒸留色の液体として得た。

b) カブラー(II)の合成 6-メチルピラゾロ[1,5-d]テトラゾールの合成

3-アミノ-5-メチルピラゾール0.97g(1.0mmol)を水10mlと液塩酸5mlの混溶液に浴かした。これに亜硝酸ナトリウム0.69g(1.0mmol)の水溶液(1.0ml)を0~5°Cで滴下し、さらに30分間そのままの温度でかくはんした。この溶液を、硫酸銅ナトリウム1.0gと水酸化ナトリウム0.4gを冷水40mlに懸濁させた中に加え、氷盤にもどるまでかくはんした。これに液塩酸1.0mlを加えて、蒸気浴上で30分間加熱した(~80°C)。減圧濃縮し、残渣をエタノールで抽出したのち減圧乾燥した。残渣を6N塩酸4mlに浴かし、亜硝酸ナトリウム0.69g(1.0mmol)の水溶液(1.0ml)を0~5°Cで滴下した。そのままの温度で1時間かくはんした。中和した。この水溶液に2.0mlの酢酸エチルを加え、よく抽出し、酢酸エチル層を分離し、無水硫酸ナトリウムで乾燥した。溶媒を減圧除去し、残渣物をシリカゲルカラムクロマト(溶媒液: CHCl<sub>3</sub>:メタノール=1.0:1)で精製し、無色粉末状のカブラー(II)を0.53g得た。

元素分析  
理論値 H(4.09%)、C(39.02%)、N(56.89%)  
実験値 H(4.11%)、C(39.01%)、N(56.83%)

## 合成例2

1H-7-クロロ-6-ヘプタデシルピラゾロ[1,5-d]テトラゾール(例示カブラー(II))の合成

3-オキソエイコサノニトリル3.1g(ステアロイルクロリドとナトリウムシアンメチリドより合成: J. Org. Chem. 25 736(1960年)参照)と50mlの水浴ヒドラジン1.2gを1.5mlのエタノール中で合成例1と同様に加熱還流し、3-アミノ-5-ヘプタデシルピラゾール

-47-

を2.49g得た。

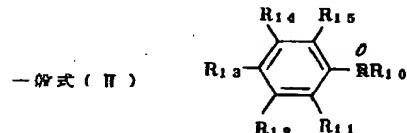
以下の骨格合成は、合成例1と同様に行ない1H-6-ヘプタデシルピラゾロ[1,5-d]テトラゾールを得ることが出来た。

1H-6-ヘプタデシルピラゾロ[1,5-d]テトラゾール1.75gを50mlの塩化メチレン-テトラヒドロフラン(1:1、容積)に浴溶して、200mgのN-クロロスクシニミドを添加した。室温で2時間搅拌した後、さらに50mlの塩化メチレンを添加し、飽和重そう水、水で洗浄し、塩化メチレン層を濃縮し、無色の粉末を1.83g得た。

## 元素分析

理論値 H(9.50%)、C(62.88%)、N(18.34%)  
実験値 H(9.56%)、C(62.86%)、N(18.33%)

本発明に用いられるマゼンタカブラーから形成されるマゼンタ色画素は下記一般式で表わされる。色安定化剤と併用することによって耐光堅牢性が向上する。



但し、R<sub>10</sub>は水素原子、アルキル基、アリール基、ヘテロ環基を表わし、R<sub>11</sub>、R<sub>12</sub>、R<sub>13</sub>、R<sub>14</sub>、R<sub>15</sub>は各々水素原子、ヒドロキシ基、アルキル基、アリール基、アルコキシ基、アシルアミノ基を表わし、R<sub>13</sub>はアルキル基、ヒドロキシ基、アリール基、アルコキシ基を表わす。またR<sub>10</sub>とR<sub>11</sub>は互いに閉環し、5員または6員環を形成してもよく、その時のR<sub>12</sub>はヒドロキシ基、アルコキシ基を表わす。さらにまたR<sub>10</sub>とR<sub>11</sub>が閉環し、メチレンジオキシ環を形成してもよい。さらにまたR<sub>13</sub>とR<sub>14</sub>が閉環し、5員の炭化水素環を形成してもよく、その時のR<sub>10</sub>はアルキル基、アリール基、ヘテロ環基を表わす。

-50-

これらの化合物は、米国特許3,935,016号、同3,982,944号、同4,254,216号明細書、特開昭55-21,004号、同54-145,530号明細書、英國特許公開2,077,455号、同2,062,888号明細書、米国特許3,764,337号、同3,432,300号、同3,574,627号、同3,573,050号明細書、特開昭52-152225号、同53-20327号、同53-17,729号、同55-6321号明細書、英國特許1,347,536号、英國特許公開2,066,975号明細書、特公昭54-12,337号、同48-31,625号明細書、米国特許3,700,455号明細書に記載された化合物をも含む。

本発明に用いられる写真感光材料の写真乳剤層には本願カプラーの他に通常の色形成カプラー、すなわち発色現像処理において芳香族ノ級アミン現像薬(例えば、フェニレンジアミン誘導体や、アミノフェノール誘導体など)との酸化カツブリ

- 51 -

応の生成物が無色であつて現像抑制剤を放出する無色D I Rカップリング化合物を含んでもよい。

これらのカプラーの他にカップリング反応の生成物が無色であるような無色カプラー、カップリング反応により赤外吸収を有する色素を生成する赤外カプラー、カップリング反応により黒色色像を与える黒絶色カプラー等を含んでもよい。

またこれらの他、粒状性、色再現性等の写真性能の改良を目的に特開昭54-11536号、同57-11537号に示されるようなカップリング成分を離脱するカプラーや特開昭57-138636号に示されるような発色現像主葉酸化体と酸化還元反応し得る基を離脱するカプラー等を使用することができる。

本発明のカプラーをハロゲン化銀乳剤層に導入するには公知の方法たとえば米国特許2,322,027号に記載の方法などが用いられる。たとえばフタル酸アルキルエステル(ジブチルフタレート、ジオクチルフタレートなど)、リン酸エステル(ジフェニルフオスフエート、トリフェニル

- 52 -

ングによつて発色しうる化合物を含んでもよい。例えば、マゼンタカプラーとして、5-ピラゾロンカプラー、ピラゾロベンツイミダゾールカプラー、シアノアセチルクマロンカプラー、開鎖アシルアセトニトリルカプラー等があり、イエローカプラーとして、アシルアセトアミドカプラー(例えばベンゾイルアセトアミド類、ビバロイルアセトアミド類)、等があり、シアンカプラーとして、ナフトールカプラー、およびフェノールカプラー、等がある。これらのカプラーは分子中にパラスト基とよばれる吸水基を有するか、ポリマー状で非拡散のものが望ましい。カプラーは銀イオンに対し当量性あるいは2当量性のどちらでもよい。また英國特許2,083,640Aに示されるよう現像により適度な拡散性を有する色素を生成するカプラーであつてもよい。また色補正の効果をもつカラードカプラー、あるいは現像剤とともに現像抑制剤を放出するカプラー(いわゆるD I Rカプラー)であつてもよい。

またD I Rカプラー以外にも、カップリング反

- 52 -

フォスフエート、トリクレジルフォスフエート、ジオクチルブチルフォスフエート)、クエン酸エステル(たとえばアセチルクエン酸トリブチル)、安息香酸エステル(たとえば安息香酸オクチル)、アルキルアミド(たとえばジエチルラウリルアミド)、脂肪酸エステル類(たとえばジブトキシエチルサクシネート、ジオクチルアセレート)、トリメシン酸エステル類(たとえばトリメシン酸トリブチル)など、または沸点約30°C乃至150°Cの有機溶媒、たとえば酢酸エチル、酢酸ブチルのどとき低級アルキルアセテート、フロピオニ酸エチル、2級ブチルアルコール、メチルイソブチルケトン、2-エトキシエチルアセテート、メチルセロソルブアセテート等に溶解したのち、親水性コロイドに分散される。上記の高沸点有機溶媒と低沸点有機溶媒とを混合して用いてもよい。

また特公昭51-39853号、特開昭51-59943号に記載されている高分子による分散法も使用することができる。

カプラーがカルボン酸、スルファン酸のどとき

- 54 -

酸基を有する場合には、アルカリ性水溶液として  
親水性コロイド中に導入される。

本発明の感光材料を製造するために用いられるハロゲン化銀として臭化銀、沃臭化銀、沃塩臭化銀、塩臭化銀および塩化銀のいずれでもよい。好ましいハロゲン化銀は沃臭化銀である。

本発明に用いられる写真乳剤は、メチシ色素類その他のによつて分光増感されてよい。これらの増感色素は单独に用いてもよいが、それらの組合せを用いてもよく、増感色素の組合せは特に強色増感の目的でしばしば用いられる。増感色素とともに、それ自身分光増感作用をもたない色素あるいは可視光を実質的に吸収しない物質であつて、強色増感を示す物質を乳剤中に含んでもよい。

有用な増感色素、強色増感を示す色葉の組合せ及び強色増感を示す物質はリサーチ・デスクロージャ(Research Disclosure)ノ76巻17643(1978年2月発行)第23頁NのJ項に記載されている。

本発明の絶光材料には親水性コロイド粒子にフィ

- 55 -

トロインダゾール類、トリアゾール類、ベンゾトリアゾール類、ベンズイミダゾール類（特にニトローやまたはハロゲン置換体）；ヘテロ環メルカプト化合物類たとえばメルカプトチアゾール類、メルカプトベンゾチアゾール類、メルカプトベンズイミダゾール類、メルカナトチアジアゾール類、メルカプトテトラゾール類（特にノーフエニル-2-メルカプトテトラゾール）、メルカプトピリミジン類；カルボキシル基やスルホン基などの水溶性基を有する上記のヘテロ環メルカプト化合物類；チオケト化合物たとえばオキサゾリンチオオン；アザインデン類たとえばテトラアザインデン類（特に4-ヒドロキシ置換（1, 3, 3a, 7）テトラアザインデン類）；ベンゼンチオスルホン酸類；ベンゼンスルフィン酸；などのようなカブリ防止剤または安定剤として知られた多くの化合物を加えることができる。

本発明の感光材料は色カブリ防止剤として、ハイドロキノン誘導体、アミノフェノール誘導体、没食子誘導体、アスコルビン誘導体などを含

ルター染料として、あるいはイラジエーション防止その他色々の目的で、水溶性染料を含有してよい。このような染料にはオキソノール染料、ヘミオキソノール染料、スチリル染料、メロシアニン染料、シアニン染料及びアゾ染料が包含される。中でもオキソノール染料；ヘキオキソノール染料及びメロシアニン染料が有用である。

本発明の写真感光材料の写真乳剤層には感度上昇、コントラスト上昇、または現像促進の目的で、例えばポリアルキレンオキシドまたはそのエーテル、エステル、アミンなどの崩壊体、チオエーテル化合物、チオモルフォリン類、四级アンモニウム塩化合物、ウレタシ醇導体、尿素醇導体、イミダゾール醇導体、ヨーピラソリドン類等を含んでよい。

本発明に用いられる写真乳剤には、感光材料の鍛造工程、保存中あるいは写真処理中のカブリを防止、あるいは写真性能を安定化させる目的で、前々の化合物を含有させることができる。すなわちアゾール類たとえばベンゾチアゾリウム塩、ニ

- 56 -

有してもよい。

本発明を用いて作られる感光材料には親水性コロイド樹に紫外線吸収剤を含んでよい。たとえばアリール基で置換されたベンゾトリアゾール化合物、ターチアソリドン化合物、ベンゾフェノン化合物、桂皮酸エステル化合物、ブタジエン化合物、ベンゾオキサゾール化合物、さらに紫外線吸収性のポリマーなどを用いることができる。これらの紫外線吸収剤は上記親水性コロイド樹中に固定されてもよい。

本発明に用いられるカラー塊状液は、一般に、発色現像主剤を含むアルカリ性水溶液から成る。発色現像主剤は公知の一級芳香族アミン現像剤、例えばフェニレンジアミン類(例えば4-アミノ-N,N-ジエチルアニリン、3-メチル-4-アミノ-N,N-ジエチルアニリン、4-アミノ-N-エチル-N-β-ヒドロキシエチルアニリン、3-メチル-4-アミノ-N-エチル-N-β-ヒドロキシエチルアニリン、3-メチル-4-アミノ-N-エチル-N-β-メタンスルホア

- 58 -

ミドエチルアニリン、4-アミノ-3-メチル-N-エチル-N-β-メトキシエチルアニリンなど)を用いることができる。

この他し、F. A. Mason著Photographic Processing Chemistry(Focal Press刊、1966年)のP.226~229、米国特許2,193,015号、同2,592,364号、特開昭48-64933号などに記載のものを用いてもよい。

カラ-現像液はその他、アルカリ金属の亜硫酸塩、炭酸塩、ホウ酸塩、及びリン酸塩の如きpH緩衝剤、臭化物、沃化物、及び有機カブリ防止剤の如き現像抑制剤ないし、カブリ防止剤などを含むことができる。又必要に応じて、硬水軟化剤、ヒドロキシルアミンの如き保恒剤、ベンジルアルコール、エチレンジリコールの如き有根溶剤、ポリエチレンジリコール、四級アンモニウム塩、アミン類の如き現像促進剤、色素形成カプラー、競争カプラー、ナトリウムボロンハイドライドの如きかぶらせ剤、1-フェニル-3-ピラゾリド

- 59 -

る。エチレンジアミン四酢酸鉄(Ⅲ)錯塩は独立の漂白液においても、一浴漂白淀溶液においても有用である。

本発明に用いられるハロゲン化銀乳剤は、通常水溶性銀塩(例えば硝酸銀)溶液と水溶性ハロゲン塩(例えば臭化カリウム)溶液とをゼラチンの如き水溶性高分子溶液の存在下で混合してつくられる。このハロゲン化銀としては、塩化銀、臭化銀のほかに、混合ハロゲン化銀、例えば塩臭化銀、沃酮化銀、塩沃臭化銀等を用いることができる。ハロゲン化銀粒子の平均粒子サイズ(球状または球に近似の粒子の場合は、粒子直径、立方体粒子の場合は、棱長を粒子サイズとし、投影面積にもとづく平均で表す)は、2μ以下が好ましいが、特に好ましいのは0.4μ以下である。粒子サイズ分布は狭くても広くてもいすれでもよい。

これらのハロゲン化銀粒子の形は立方晶形、八面体、その混合晶形等どれでもよい。

また平板状、特に直径/厚みが5以上、特に8以上の粒子が粒子の全投影面積の50%以上を占

- 60 -

ンの如き補助塩像葉、粘性付与剤、米国特許4,083,723号に記載のポリカルボン酸系キレート剤、西独公開(OLS)2,622,950号に記載の酸化防止剤などを含んでもよい。

発色塩像後の写真乳剤層は通常漂白処理される。漂白処理は、定着処理と同時に行われてもよいし、個別に行われてもよい。漂白剤としては、例えば鉄(Ⅲ)、コバルト(Ⅲ)、クロム(Ⅳ)、銅(Ⅱ)などの多価金属の化合物、過酸類、キノン類、ニトロソ化合物等が用いられる。例えば、フェリシアン化物、重クロム酸塩、鉄(Ⅲ)またはコバルト(Ⅲ)の有機錯塩、例えばエチレンジアミン四酢酸、ニトリロトリ酢酸、1,3-ジアミノ-2-エチルエチレングリコール四酢酸などのアミノポリカルボン酸類あるいはクエン酸、酒石酸、リンゴ酸などの有根酸の錯塩、過硫酸塩、過マンガン酸塩、ニトロソフェノールなどを用いることができる。これらのうちフェリシアン化カリ、エチレンジアミン四酢酸鉄(Ⅲ)ナトリウム及びエチレンジアミン四酢酸鉄(Ⅲ)アンモニウムは特に有用である。

- 60 -

めている乳剤と併用することもできる。

又、別々に形成した2種以上のハロゲン化銀写真乳剤を混合してもよい。更に、ハロゲン化銀粒子の結晶構造は内部まで一様なものであつても、また内部と外部が異質の層状構造をしたものや、英國特許635,841号、米国特許3,622,318号に記載されているような、いわゆるコンバージョン型のものであつてもよい。又、像像を中心として表面に形成する型のもの、粒子内部に形成する内部像像型のものいすれでもよい。これらの写真乳剤はMees(ミース)著、"The Theory of Photographic Process"(ザ・セオリー・オブ・ホトグラフィック・プロセス)、MacMillan社刊; P. Gafkides(ピー・グラフキデ)著、"Chimie Photographique"(シミー・ホトグラフィー)、Paul Montel社刊(1957年)等の成書にも記載され、一般に認められている。P. Gafkides著Chimie et Physique Photographique(Paul Montel社刊、

- 61 -

1967年)、G. F. Duffin 着  
Photographic Emulsion Chemistry  
(The Focal Press 刊、1966年)、V. L. Zelikman et al 着 Making and Coating Photographic Emulsion  
(The Focal Press 刊、1964年)などに記載された方法を用いて調整することができる。即ち、酸性法、中性法、アンモニア法等のいずれでもよく、又可溶性銀塩と可溶性ハロゲン塩を反応させる形式としては、片側混合法、同時混合法、それらの組合せなどのいずれを用いてもよい。

粒子を銀イオン過剰の下において形成させる方法(いわゆる逆結合法)を用いることもできる。同時結合法の一つの形式としてハロゲン化銀の生成される液相中の  $p\Delta g$  を一定に保つ方法、即ち、いわゆるコントロールド・ダブルジェット法を用いることもできる。

この方法によると、結晶形が規則的で粒子サイズが均一に近いハロゲン化銀乳剤が得られる。

別々に形成した2粒以上のハロゲン化銀乳剤を

- 63 -

ためには、前記Glaskides またはZelikmanらの著書あるいはH. Frieserの "Die Grundlagen der Photographicischen Prozesse mit Silberhalogeniden" (Akademische Verlagsgesellschaft, 1968) に記載の方法を用いることができる。

本発明を用いて作られる感光材料の写真乳剤(または他の親水性コロイド)には油溶助剤、帶電防止、スペリ性改良、乳化分散、接着防止及び写真特性改良(例えば、現像促進、硬化化、増感)等個々の目的で、個々の界面活性剤を含んでもよい。

#### 実施例1

本発明のカプラー(I)、および下記化学構造式Aで表わされる比較カプラー、それぞれ1.1ミリモルを10mlのエタノールに溶解し、この中にカプラー構成主成分である  $\text{4-N-エチル-N-}(\text{2-メタノスルホニアミドエチル})\text{アミノ-2-メチルアニリン}$  / 硫酸塩を1.9mmol懸濁させ、次に硫酸ナトリウム1.9mmolを5mlの

- 64 -

混合して用いてもよい。

ハロゲン化銀粒子形成又は物理熟成の過程において、カドミウム塩、亜鉛塩、鉛塩、タリウム塩、イリジウム塩又はその錯塩、ロジウム塩又はその錯塩、鉄塩又は鉄錯塩などを、共存させてもよい。

乳剤は沈殿形成後あるいは物理熟成後、通常可溶性塩類を除去されるが、そのための手段としては古くから知られたゼラチンをゲル化させて行うヌードル水洗法を用いてもよく、また多価アニオンより成る無機塩類、例えば硫酸ナトリウム、アニオン性界面活性剤、アニオン性ポリマー(例えばポリスチレンスルホン酸)、あるいはゼラチン錯導体(例えば脂肪族アシル化ゼラチン、芳香族アシル化ゼラチン、芳香族カルバモイル化ゼラチンなど)を利用した沈降法(フロキユレーション)を用いてもよい。可溶性塩類除去の過程は省略してもよい。

ハロゲン化銀乳剤は、化学増感を行わない、いわゆる未後処(Primitive)乳剤を用いることもできるが、通常は化学増感される。化学増感の

- 64 -

水に溶解した水溶液を添加し、室温で搅拌した。この混合液の中に、過硫酸カリウム2.4mmolを含む10mlの水溶液を徐々に滴下した。

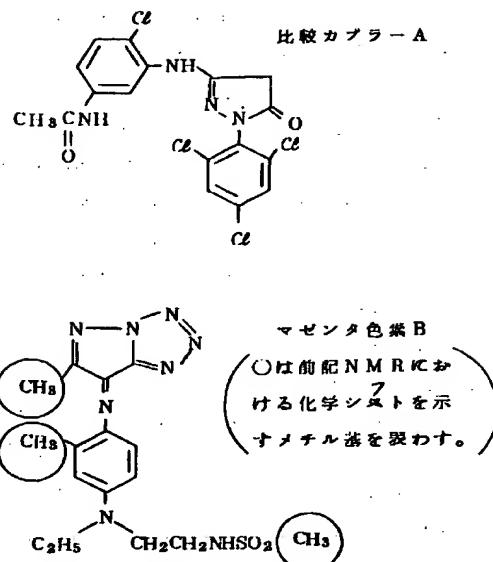
水面で1時間良く搅拌した後5.0mlの酢酸エチルと3.0mlの水を加え抽出操作を行なつた。酢酸エチル層を飽和食塩水でよく洗浄した後、溶液を除去し、残渣をシリカゲルカラムクロマトで分離した。溶出液はエチルエーテルで行なつた。本発明カプラー(I)から得られたマゼンタ色のNMRスペクトルは、質クロロホルム( $\text{CDCl}_3$ )中、以下の通りである。

$\delta$ (ppm) 8.79(d, 1H,  $J=10\text{ Hz}$ )、  
6.50-6.80(m, 2H)、  
4.15(b, 1H)、3.24-  
3.75(m, 6H)、2.93(s,  
3H)、2.48(s, 3H)、2.  
41(s, 3H)、0.81(b,  
3H)

アンダーラインで示される3つのメタル基の吸収は下記構造式Bを満足する。この色基は0.11mol

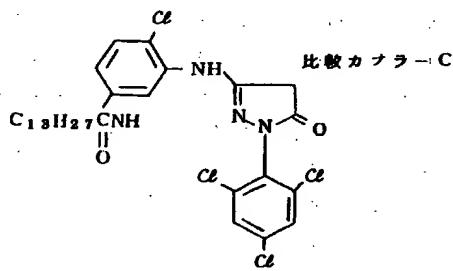
- 65 -

で結晶しなかつた。



- 67 -

溶布用助剤、ドデシルベンゼンスルホン酸ナトリウム、硬膜剤：2-ヒドロキシーエチルアクリレート；6-ジクロロ-3-トリアジンを加え三酢酸セルロース支持体上に塗布した。さらにこの層の上に保護層としてセラチン塗布液を塗布し（セラチン1g/m<sup>2</sup>）乾燥し、フィルムAとした。



一方、本発明のカブラー(3)を7.1g、使用し、上記フィルムAと同じようにしてそれぞれフィルムBを作成した。

同様にして本発明のカブラー(3)を8.1g使用し、感性性塩臭化銀乳剤200gを用いた以外は上記フィルムAと同じようにしてフィルムCを作

- 69 -

マゼンタ色素Bと比較カブラーAから形成されたマゼンタ色素の酢酸エチル中の可視吸収スペクトルを図1に示す。両者の吸収スペクトルの最高吸光度を1.0に規格化して比較した。

図1からわかるように本発明のカブラーから得られる色素は、比較カブラーAから形成される色素に比較し、λ<sub>max</sub>の位置は長波長側にシフトしているが、400～430nm付近の副吸収がなく、長波長側の裾がシャープに切れており、カラー写真感光材料に使用した場合に色再現上有利であることがわかる。

#### 実施例2

下記に示す比較カブラーC、13gにトリオクチルホスファート1.5ml、酢酸エチル1.5mlを加えて溶解し、この溶液をジ-sec-ブチルナフタレンスルホン酸ナトリウムを含む1.0%セラチン水溶液100gに加え、ホモナイザー乳化機を用いて攪拌乳化し、乳化物を得た。この乳化物を感性性塩臭化銀乳剤（Br4.5モル%，C6.5モル%）300g（銀1.3.5%含有）と混合し、

- 68 -

成した。

上記フィルムA～Cを感光計で1000ルツクス/秒で曝光し、次の処理液で処理した。

#### 処理液

ベンジルアルコール	1.5ml
ジエチレントリアミン5酢酸	3.9
KBr	0.49
Na <sub>2</sub> SO <sub>3</sub>	5.9
Na <sub>2</sub> CO <sub>3</sub>	3.09
ヒドロキシアミン硫酸塩	2.9
4-アミノ-3-メチル-N-エチル-N-(メタンスルホンアミド)エチルアミニウム	4.59
水で1000mlにする	pH 10.1

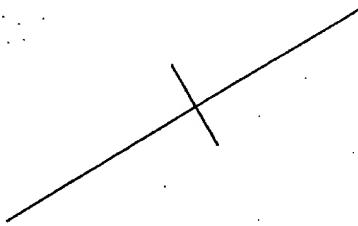
#### 蛋白定着液

チオ硫酸アンモニウム (7.0wt%)	1.50ml
Na <sub>2</sub> SO <sub>3</sub>	5.9
Na <sub>2</sub> [Fe(EDTA)]	4.09

- 70 -

水で1000倍にする	pH 6.8
処理工程	温度
現像液	33°
漂白定着液	33°
水洗	28~35° 3分

処理した後の色素像濃度をマクベス濃度計ステータスAAフィルターにて測定した。また色素像の分光吸収スペクトルをも測定した。色素像のフィルム上での吸収も実施例1と同様、劇吸収がなく長波長側の裾の切れたものであつた。発色特性について下段に掲げる。



- 7 1 -

本発明のカプラーは、従来のスピラゾロン型カプラーに比べてより高い発色濃度を与え、化合物として代表される二当量カプラーは少ない塗布量で高い発色濃度を与えることがわかる。

また420nm付近の劇吸収が本発明のカプラーでは比較カプラーに比べて非常に低く、色再現の良いことを示している。

#### 4. 図面の簡単な説明

第1図は色素の吸収スペクトルである。

A…実施例1のカプラーAから生成する色素の吸

収スペクトルである（比較例）

B…実施例1のカプラー(B)から生成する色素の吸

収スペクトルである。（本発明）

縦軸は吸収濃度（/に規格化してある）をあらわし、横軸は波長（nm）をあらわしている。

特許出願人 富士写真フィルム株式会社

フィルム	カプラー	モル比 Ag/Cp	最大吸収波長	吸収率(420nm における吸収波長)
				比較カプラー(C) 本発明のカプラー(B)
A		6	426nm	0.137
B		6	426nm	0.051
C		6	424nm	0.050

最大吸収強度をノードしたとき

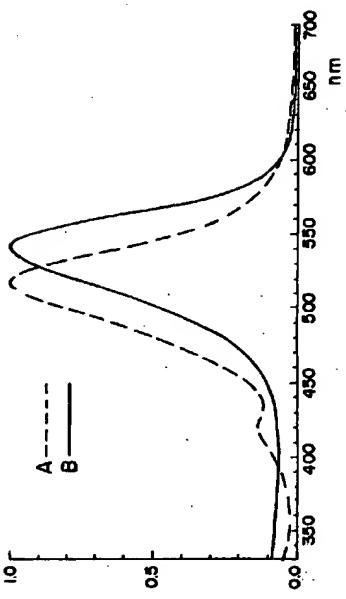


図 1 比較

- 7 2 -

## 手続補正書

昭和59年11月2日

特許庁長官 殿

1. 事件の表示 昭和58年特願第142801号

2. 発明の名称 カラー画像形成方法

3. 補正をする者

事件との関係 特許出願人

住所 神奈川県南足柄市中沼210番地

名称(520)富士写真フィルム株式会社

代表者 大西 實

連絡先 〒106 東京都港区西麻布2丁目26番30号

富士写真フィルム株式会社 東京本社 特許庁  
電話 (406) 2537

と補正する。

5. 第9頁/1行目の

「プチル」を  
「ブタン」

と補正する。

6. 第9頁/2行目の

「フェノキシ) プチル」を  
「フェノキシ) ブタン」

と補正する。

7. 第9頁/3行目の

「N, Nのジブチ」を  
「N, N-ジブチ」

と補正する。

8. 第11頁/1行目の

「ドデシル」を  
「ドデカン」

と補正する。

9. 第11頁/2行目の

「フェニル」を  
「ベンゼン」

- 2 -

4. 補正の対象 明細書の「発明の詳細な説明」  
の欄および図面

5. 補正の内容

(1) 明細書の「発明の詳細な説明」の欄の記載  
を以下のように補正する。

1. 第3頁/1行目の

「堅牢性の高く」を  
「堅牢性が高く」

と補正する。

2. 第7頁/2行目の

「カルボキシ基」を  
「カルボキシル基」

と補正する。

3. 第7頁/3行目の

「ヘキシル」を  
「ヘキサン」

と補正する。

4. 第8頁/1行目の

「ドデシル」を  
「ドデカン」

- / -

と補正する。

5. 第11頁/1行目の

「ドデシル」を  
「ドデシルオキシ」

と補正する。

6. 第11頁/2行目の

「オクタデシル」を  
「オクタデシルオキシ」

と補正する。

7. 第11頁/3行目の

「オキシー」を  
「フェノキシ」

と補正する。

8. 第12頁/1行目の

「フェノキシル基」を  
「フェノキシ基」

と補正する。

9. 第12頁/2行目の

「スルファモノイル」を  
「スルファモイル」

- 3 -

と補正する。

15. 第13頁6行目の

「ノーベンジルーエトキシ」を  
「ノーベンジルーオーエトキシ」

と補正する。

16. 第13頁7行目の

「トリアゾール」を  
「テトラゾール」

と補正する。

17. 第14頁5行目の

「ヘキサスルホニル」を  
「ヘキサンスルホニル」

と補正する。

18. 第14頁11行目の

「チオフェニル」を  
「チエニル」

と補正する。

19. 第18頁12～13行目の

「 $\alpha$ -アルアクリル酸」を  
「 $\alpha$ -アルキルアクリル酸」

— 4 —

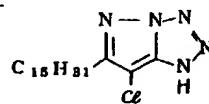
と補正する。

20. 第19頁10行目の

「メチレンジビス」を  
「メチレンビス」

と補正する。

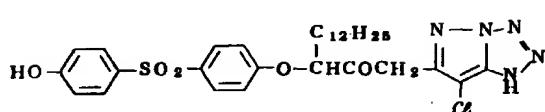
21. 第22頁化合物(4)の構造式を



と補正する。

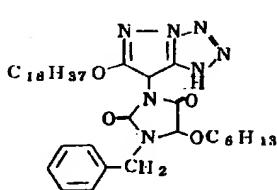
— 5 —

22. 第24頁化合物(1)の構造式を



と補正する。

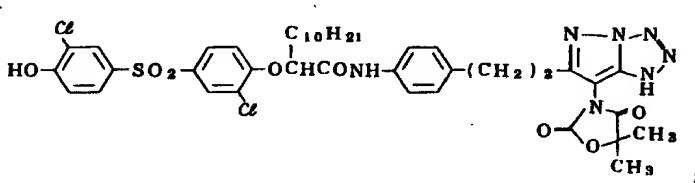
23. 第32頁化合物(2)の構造式を



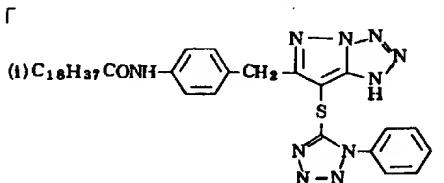
と補正する。

24. 第32頁化合物(2)の構造式を

25. 第33頁化合物(2)の構造式を



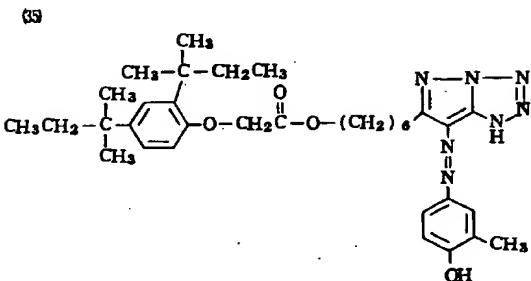
と補正する。



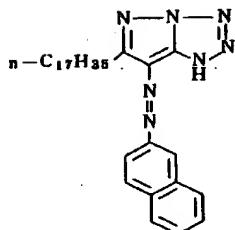
と補正する。

— 6 —

26. 第36頁化合物34の構造式の後に、以下を  
挿入する。



37



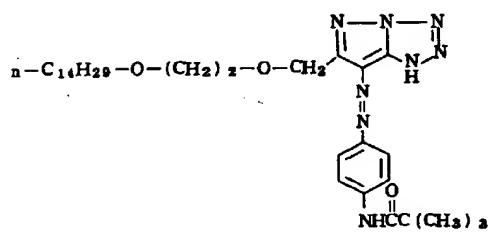
27. 第36頁の化合物36の番号を  
「38」

と補正する。

28. 第37頁の化合物36および37の番号をそれ  
ぞれ

「39」および「40」  
と補正する。

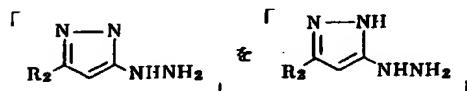
36



- 7 -

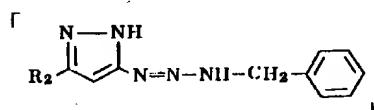
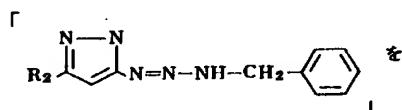
- 8 -

29. 第38頁中段の化合物の構造式



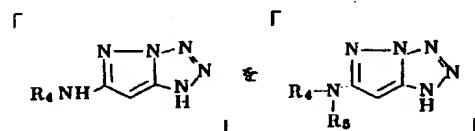
と補正する。

30. 第39頁上段の化合物の構造式



と補正する。

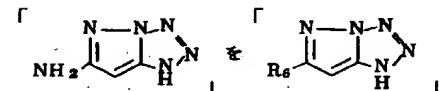
31. 第40頁上段右の化合物の構造式



と補正する。

- 9 -

32. 第40頁下段左の化合物の構造式



と補正する。

33. 第41頁3行目の

「21 698」を  
「21 698」

と補正する。

34. 第41頁6行目の

「89 255」を  
「89 255」

と補正する。

35. 第42頁4行目の

「一般式I」を  
「一般式(I)」

と補正す。

36. 第42頁7~8行目の

「アルアクリル酸」を  
「 $\alpha$ -アルキルアクリル酸」

- 10 -

と補正する。

47. 第42頁/4~5行目の

「100 °位」を

「100 °C位」

と補正する。

48. 第43頁/1行目の

「pd」を

「Pd」

と補正する。

49. 第44頁/4行目の

「pd」

「Pd」

と補正する。

50. 第44頁/5行目の

「塩素ヘテロ」を

「含塩素ヘテロ」

と補正する。

51. 第44頁/7行目の

「ザアザ」

「ジアザ」

- / -

と補正する。

52. 第46頁/7行目の

「クロトノニトリル」を

「クロトノニトリル」

と補正する。

53. 第46頁/8行目の

「ヒドラジーノ」を

「ヒドラジン」

と補正する。

54. 第48頁/7行目の

「J. Org. Chem. 25, 736」を

「J. Org. Chem., 25, 736」

と補正する。

55. 第50頁/4行目の

「R<sub>12</sub>」を

削除する。

56. 第52頁/3行目の

「ベンツイミダゾール」を

「ベンズイミダゾール」

と補正する。

- / 3 -

と補正する。

57. 第45頁3~4行目の

「芳香族蜜素」を

「芳香族含蜜素」

と補正する。

58. 第45頁8行目の

「芳香族蜜素」を

「芳香族含蜜素」

と補正する。

59. 第45頁9~10行目の

「アルデヒド」を

「アミド」

と補正する。

60. 第45頁11~12行目の

「150 °で」を

「150 °Cで」

と補正する。

61. 第46頁/10行目の

「臭素塩酸」を

「臭素酸塩」

- / 2 -

52. 第53頁20行目の

「メタンスルホ」を

「メタンスルホン」

と補正する。

53. 第61頁/9行目の

「直径/厚みが」を

「直径/厚みの比が」

と補正する。

54. 第63頁/7行目の

「調整」を

「調製」

と補正する。

55. 第66頁/10行目の

「COCl<sub>2</sub>」を

「CDCl<sub>3</sub>」

と補正する。

56. 第66頁/3行目の

「δ (ppm)」を

「δ (ppm)」

と補正する。

- / 4 -

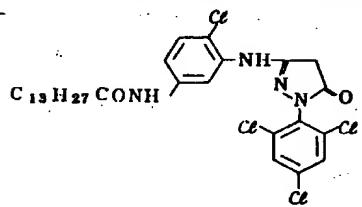
57. 第68頁5行目の

「図-1」を

「第1図」

と補正する。

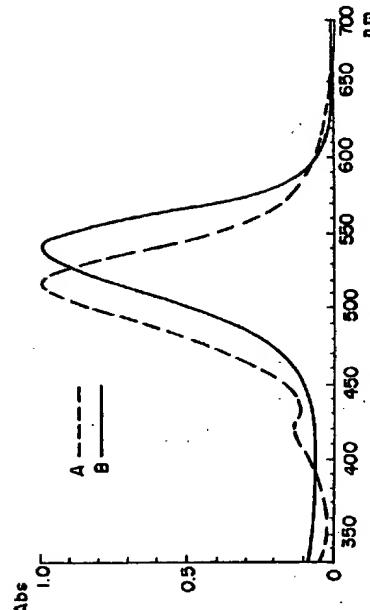
58. 第69頁比較カプラーCの構造式を



と補正する。

(2) 図面を別紙のように補正する。

第一図



- / 5 -

## ⑪ 公開特許公報 (A) 昭60-33552

⑫ Int. Cl. 1 G 03 C 7/38 // C 07 D 487/04 519/00	識別記号 136	庁内整理番号 7265-2H 8115-4C 8214-4C	⑬ 公開 昭和60年(1985)2月20日 審査請求 未請求 発明の数 1 (全 24 頁)
---	-------------	---	---

## ⑭ 発明の名称 カラー画像形成方法

⑮ 特願 昭58-142801

⑯ 出願 昭58(1983)8月4日

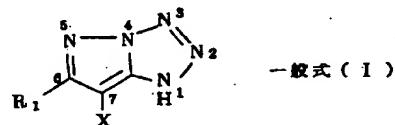
⑰ 発明者 川岸 俊雄 南足柄市中沼210番地 富士写真フィルム株式会社内  
 ⑱ 発明者 佐藤 忠久 南足柄市中沼210番地 富士写真フィルム株式会社内  
 ⑲ 発明者 古館 信生 南足柄市中沼210番地 富士写真フィルム株式会社内  
 ⑳ 出願人 富士写真フィルム株式会社 南足柄市中沼210番地  
 会社

## 明細書

## 1. 発明の名称 カラー画像形成方法

## 2. 特許請求の範囲

下記一般式(Ⅰ)で表わされるカプラーを芳香族一级アミン現像主薬の酸化生成物と反応させることを特徴とするハロゲン化銀を使用するカラー画像形成方法。



但し、Xは水素原子またはカップリング離脱基を表わし、R<sub>1</sub>は水素原子、または置換基を表わす。また、R<sub>1</sub>またはXで2量体以上の多量体を形成してもよい。

## 3. 発明の詳細な説明

本発明は、ハロゲン化銀によつて酸化された芳香族一级アミンの酸化生成物とカップリング反応して新規なマゼンタ色画像を形成する画像形成法

に関する。さらに詳しくは新規なマゼンタカプラーであるN-ヒドロキソ[1,2-ジ]テトラゾールを使用する画像形成法に関する。

露光されたハロゲン化銀を酸化剤として、酸化された芳香族一级アミン系カラー現像主薬とカプラーが反応して、インドフェノール、インドアニリン、インダミン、アゾメチン、フェノキサジン、フェナジン及びそれに類する色素ができる、色画像が形成されることは良く知られている。

これらのうち、マゼンタ色画像を形成するためにはN-ヒドロキソ、シアノアセトフェノン、インダゾロン、ピラゾロベンズイミダゾール、ピラゾロトリアゾール系カプラーが使われる。

従来、マゼンタ色画像形成カプラーとして広く実用に供され、研究が進められていたのはほとんどN-ヒドロキソ系である。N-ヒドロキソ系カプラーから形成される色素は熱、光に対する堅牢性に優れているが、430 nm付近に黄色成分を有する不規則吸収が存在していて色にどりの原因となつている事が知られていた。

この貨色成分を減少させるマゼンタ色画像形成骨核として英國特許 1,047,612 号に記載されるピラゾロベンズイミダゾール骨核、米国特許 3,770,447 号に記載されるインダゾロン骨核、また米国特許 3,725,067 号に記載されるピラゾロトリアゾール骨核が提案されている。

しかしながらこれらの特許に記載されているマゼンタカブラーは、ゼラチンのような親水性保険コロイド中に分散されたかたちで、ハロゲン化銀乳剤に混合するとき、不満足の色画像しか与えなかつたり、高沸点有機溶媒への溶解性が低かつたり、合成的に困難であつたり、普通の現像液では比較的ひくいカップリング活性しか有さなかつたりして未だ不満足のものである。

本発明の発明者は、オーピラゾン系カプラーの色相上最大の欠点である430 nm付近の即吸収を示さない新しいタイプのマゼンタ色画像カプラーを日々探索した結果、短波長側に即吸収を示めさなく、色像の堅牢性の高く、合成的にも容易な一連のカプラー群に到達した。したがつて本発

- 3 -

を形成してもよい。

本発明のカラー画像形成方法において好ましいのは一般式(1)であらわされるカプラーを含むハロゲン化銀感光材料を利用する場合である。

一般式(Ⅰ)において多亜体とは1分子中に2つ以上の一級式(Ⅰ)であらわされる基を有しているものを意味し、ビス体やポリマー・カプラーもこの中に含まれる。ここでポリマー・カプラーは一般式(Ⅰ)であらわされる部分を有する単亜体(好ましくはビニル基を有するもの、以下ビニル単亜体といいう)のみからなるホモポリマーでもよいし、芳香族一級アミン現象基の酸化生成物とカシクリングしない非発色性エチレン級単亜体とともにコポリマーを作つてもよい。

ポリマー・カプラーの分子量は5000以上が適当であり、10000以上をならお好ましく、5000以上であれば特に好ましい。

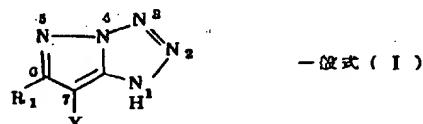
本説明のカプラーは感光材料へ添加してもよいし、発色現像液に添加して用いてもよい。感光材料への添加量はヘロゲン化銀 / モル当り  $2 \times 10^{-3}$

- 3 -

明の目的は、色再現上銹れ、着色速度、最大発色速度に銹れ、合成的にも銹れ、カップリング活性位に離脱基を導入することによつて、いわゆるメタ化でき、使用量は剛波できる新規なマゼンタ色画像形成カッラーを提供し、これらのカッラーを使用したマゼンタ色画像形成法を提供することにある。

前記の目的は、

下記一般式(I)で表わされるカブラーを芳香族一级アミン現役主塩の酸化生成物と反応させることを特徴とするハロゲン化鉄を使用するカラーパレ形成方法により選成された。



但し、式中、Xは水素原子またはカップリング置換基を表わし、R<sub>1</sub>は水素原子または置換基を表わす。またR<sub>1</sub>またはXで2個体以上の多官能

— 4 —

モル～ $5 \times 10^{-1}$ モル、好ましくは $1 \times 10^{-2}$ ～ $5 \times 10^{-1}$ モルであり、多量体の場合には発色部分が上記の量だけ入るようにポリマーーカプラーの添加量を調節すればよく、発色現像液に添加して用いるときは浴 $1000\text{cc}$ 当たり、 $0.001$ ～ $0.1$ モル、好ましくは $0.01$ ～ $0.05$ モルが適当である。

一般式(Ⅰ)において好ましくは、R<sub>1</sub>は水素原子、ハロゲン原子、アルキル基、アリール基、ヘテロ環基、シアノ基、アルコキシ基、アリールオキシ基、ヘテロ環オキシ基、アシルオキシ基、カルバモイルオキシ基、シリルオキシ基、スルホニルオキシ基、アシルアミノ基、アニリノ基、ウレアド基、イミド基、スルファモイルアミノ基、カルバモイルアミノ基、アルキルチオ基、アリールチオ基、ヘテロ環チオ基、アルコキシカルボニルアミノ基、アリールオキシカルボニルアミノ基、スルホンアミド基、カルバモイル基、アシル基、スルファモイル基、スルホニル基、スルフィニル基、アルコキシカルボニル基、アリールオキシカ

- 6 -

カルボニル基、を表わし、Xは水素原子、ハロゲン原子、カルボキシ基、または酸素原子、硫素原子もしくはイオウ原子を介してカップリング位の炭素と結合する基でカップリング離脱する基を表わす。

R<sub>1</sub>またはXが2価の基となりビス体を形成してもよく、

また一般式(I)で表わされる部分がビニル单體体の中にあるときは、R<sub>1</sub>は單なる結合または連結基をあらわし、これを介して一般式(I)で表わされる部分はビニル基に結合する。

さらに詳しくはR<sub>1</sub>は水素原子、ハロゲン原子(例えば、塩素原子、臭素原子、等)アルキル基(例えば、メチル基、プロピル基、エーピチル基、トリフルオロメチル基、トリデシル基、3-(2,4-ジメチルフエニル基)プロピル基、アリル基、エードデシルオキシエチル基、3-フエノキシプロピル基、2-ヘキシルスルホニルエチル基、シクロベンチル基、ベンジル基、等)、アリール基(例えば、フェニル基、4-メチルフェニル基、等)。

-7-

アミルフエノキシ)ブチルアミド基、3-(3-エーピチル-4-ヒドロキシフェノキシ)ブチルアミド基、3-(4-(4-ヒドロキシエニルスルホニル)フェノキシ)デカンアミド基、等)、アニリノ基(例えばフェニルアミノ基、2-クロロアニリノ基、2-クロロ-3-アミドアニリノ基、2-クロロ-3-(3-(3-エーピチル-4-ヒドロキシフェノキシ)ドデカソアミド)アニリノ基、等)、ウレア基(例えば、フェニルウレア基、メチルウレア基、N,Nのジブチルウレア基、等)、イミド基(例えば、N-スクレンジイミド基、2-ベンジルヒダントイニル基、3-(2-エチルヘキサノイルアミノ)フタルイミド基、等)、スルフアモイルアミノ基(例えば、N,N-ジプロピルスルフアモイルアミノ基、N-メチル-N-デシルスルフアモイルアミノ基、等)、アルキルチオ基(例えば、メチルチオ基、オクチルチオ基、テトラデシルチオ基、等)。

-9-

ルフエニル基、2,4-ジメチルフエニル基、4-テトラデカンアミドフエニル基、等)、ヘテロ環基(例えば、2-フリル基、2-チエニル基、2-ビリミジニル基、2-ベンゾチアゾリル基、等)、シアノ基、アルコキシ基(例えばメトキシ基、エトキシ基、2-メトキシエトキシ基、2-オーデシルオキシエトキシ基、2-メタンスルホニルエトキシ基、等)、アリールオキシ基(例えば、フェノキシ基、2-メチルフェノキシ基、4-メチルフェノキシ基、等)、ヘテロ環オキシ基(例えば、2-ベンズイミダゾリルオキシ基、等)、アシルオキシ基(例えば、アセトキシ基、ヘキサデカノイルオキシ基、等)、カルバモイルオキシ基(例えば、N-フエニルカルバモイルオキシ基、N-エチルカルバモイルオキシ基、等)、シリルオキシ基(例えば、トリメチルシリルオキシ基、等)、スルホニルオキシ基(例えば、ドデシルスルホニルオキシ基、等)、アシルアミノ基(例えば、アセトアミド基、ベンズアミド基、テトラデカンアミド基、3-(2,4-ジメチル-

-8-

ノキシエチルチオ基、3-フエノキシプロピルチオ基、3-(4-メチルフェノキシ)プロピルチオ基、等)、アリールチオ基(例えば、フェニルチオ基、2-ブロキシ-3-メオクチルフェニルチオ基、3-ベンゼンタデシルフェニルチオ基、2-カルボキシエニルチオ基、4-テトラデカンアミドエニルチオ基、等)、ヘテロ環チオ基(例えば、2-ベンゾチアゾリルチオ基、等)、アルコキシカルボニルアミノ基(例えば、メトキシカルボニルアミノ基、テトラデシルオキシカルボニルアミノ基、等)、アリールオキシカルボニルアミノ基(例えば、フェノキシカルボニルアミノ基、2,4-ジメチル-3-ブチルフェノキシカルボニルアミノ基、等)、スルホニアミド基(例えば、メタンスルホニアミド基、ヘキサデカノスルホニアミド基、ベンゼンスルホニアミド基、p-トルエンスルホニアミド基、オクタデカノスルホニアミド基、2-メチルオキシ-3-メオブチルベンゼンスルホニアミド基、等)、カルバモイル基(例えば、N-エチルカルバモイル基、N-

-10-

N-ジブチルカルバモイル基、N-(2-ドデシルオキシエチル)カルバモイル基、N-メチル-N-ドデシルカルバモイル基、N-(2,4-ジ-tert-アミルフェノキシ)プロピルカルバモイル基、等)、アシル基(例えば、アセチル基、(2,4-ジ-tert-アミルフェノキシ)アセチル基、ベンゾイル基、等)、スルフアモイル基(例えば、N-エチルスルフアモイル基、N,N-ジプロピルスルフアモイル基、N-(2-ドデシルオキシエチル)スルフアモイル基、N-エチル-N-ドデシルスルフアモイル基、N,N-ジエチルスルフアモイル基、等)、スルホニル基(例えば、メタノスルホニル基、オクタンスルホニル基、ベンゼンスルホニル基、トルエンスルホニル基、等)、スルフィニル基(例えば、オクタンスルフィニル基、ドデシルスルフィニル基、フェニルスルフィニル基、等)、アルコキシカルボニル基(例えば、メトキシカルボニル基、ブチロキシカルボニル基、ドデシルカルボニル基、オクタデシルカルボニル基、等)、アリールオキ

-11-

3,4,5,6-ペンタフルオロベンズアミド基、オクタンスルホンアミド基、p-シアノフェニルウレアド基、N,N-ジエチルスルフアモノイルアミノ基、N-ビペリジル基、5,5-ジメチル-2,4-ジオキソ-3-オキサゾリジニル基、N-ベンジル-エトキシ-3-ヒダントイニル基、2N-1,1-ジオキソ-3(2H)-オキソ-1,2-ベンゾイソチアゾリル基、2-オキソ-1,2-ジヒドロ-1-ビリジニル基、イミダゾリル基、ピラゾリル基、3,5-ジエチル-1,2,4-トリアゾール-1-イル、5-または6-ブロモ-ベンゾトリアゾール-1-イル、5-メチル-1,2,3,4-トリアゾール-1-イル基、ベンゼイミダゾリル基、2-ベンジル-1-ヒダントイニル基、N-ベンジル-3-ヘキサデシルオキシ-3-ヒダントイニル基、5-メチル-1-テトラゾリル基、4-メトキシフェニルアゾ基、4-ビペロイルアミノフェニルアゾ基、2-ヒドロキシ-4-ブロバノイルフェニルアゾ基等)イオウ原子で連結する基(例えば、フェニ

-13-

カルボニル基(例えば、フェニルオキシカルボニル基、3-ペントデシルオキシカルボニル基、等)を表わし、Xは水素原子、ハロゲン原子(例えば、塩素原子、臭素原子、ヨウ素原子等)、カルボキシ基、または酸素原子で連結する基(例えば、アセトキシ基、ブロバノイルオキシ基、ベンゾイルオキシ基、2,4-ジクロロベンゾイルオキシ基、エトキシオキザロイルオキシ基、ビルビニルオキシ基、シンナモイルオキシ基、フェノキシ基、p-シアノフェノキシ基、4-メタノスルホンアミドフェノキシ基、4-メタノスルホニルフェノキシ基、2-エチルオキシ基、2-エチルオキシ基、2-エチルテトラゾリルオキシ基、2-ベンゾチアゾリルオキシ基、等)、塩素原子で連結する基(例えば、ベンゼンスルホンアミド基、N-エチルトルエンスルホンアミド基、ペプタフルオロブタンアミド基、2,

-12-

ルチオ基、2-カルボキシフェニルチオ基、3-メトキシ-2-メオクチルフェニルチオ基、4-メタノスルホニルチオ基、4-オクタノスルホンアミドフェニルチオ基、2-ブロトキシフェニルチオ基、2-(2-ヘキサスルホニルエチル)-5-tert-オクチルフェニルチオ基、ベンジルチオ基、p-シアノエチルチオ基、N-エトキシカルボニルトリデシルチオ基、2-エニル-2,3,4,5-テトラゾリルチオ基、2-ベンゾチアゾリルチオ基、2-ドデシルチオ-3-テオフェニルチオ基、2-エニル-3-ドデシル-1,2,4-トリアゾリル-5-チオ基等)を表わす。

R<sub>1</sub>またはXが2価の基となつてビス体を形成する場合、この2価の基をさらに詳しく述べれば、R<sub>1</sub>は置換または無置換のアルキレン基(例えば、メチレン基、エチレン基、1,10-デシレン基、-CH<sub>2</sub>CH<sub>2</sub>-O-CH<sub>2</sub>CH<sub>2</sub>-等)、置換または無置換のフェニレン基(例えば、1,4-エニレン基、1,3-エニレン基、

-14-